

農作物技術情報 第6号 畑作物

発行日 令和8年8月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 大豆 紫斑病とマメシンクイガの防除時期を迎えていますので、収量・品質確保のため、必ず薬剤散布を実施しましょう。
- ◆ 小麦 令和9年産小麦の栽培が始まります。収量確保のためには、越冬前に十分な生育量を確保することが必須です。排水対策は早めの実施し、播種は無理せず土壌条件が整ってから適期に行いましょう。

大豆

1 生育概況

7月下旬から8月上旬にかけての降雨により、やや湿害気味の生育でしたが、現在は回復し順調に生育が進んでいます。また、8月中旬以降は適度に降雨があり、適度な土壌水分を維持できているほ場が多く、順調に莢が発達しています。

現在、多くのほ場で子実肥大期となっており、紫斑病とマメシンクイガの防除時期を迎えています。

2 今後のほ場管理

(1) 排水対策

集中豪雨による冠水・浸水被害や湿害を避けるため、畦溝と排水溝を連結するとともに、明渠や水尻にゴミなどの詰まりや崩れがないか確認します。また、排水口（フリードレン下部）の高さを確認し、ほ場内排水を促すよう掘り下げてください。

(2) 病虫害防除

マメシンクイガ（写真1）の防除適期は、県北部で8月第5半旬、県央・県南部で8月第6半旬となっています。

紫斑病の防除適期は、若莢期（開花後20日頃）～子実肥大期（開花後40日頃）です。薬剤が莢によく付くように、散布します。

また、吸実性カメムシ類（写真2）の発生が見られるほ場では、有機リン剤や合成ピレスロイド剤等による防除を実施します。

農業用ドローンでの防除は莢への薬剤付着が他の防除方法より劣るため、効果が不安定となることがあります。例年病虫害の被害が大きいほ場は、地上防除の実施を検討してください。



写真1 マメシンクイガの成虫

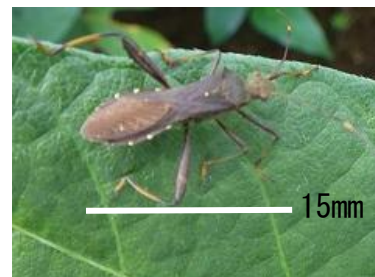


写真2 ホソヘリカメムシ

(3) 手取り除草の実施

雑草は収穫時に汚損粒の原因となりますので、早めに除草します。

シロザやアメリカセンダングサなどの大型雑草のほか、近年拡大傾向にある帰化アサガオ類やアレチウリなど、防除が難しい雑草が発生しているほ場では、**雑草が種子をつける前に除草**を行ってください。

3 台風対策

台風の影響を受けやすい時期になります。土壌表面の排水を促進するため周囲溝や排水口等を点検・補修し、土壌表面水を速やかに排水する等、必要な対策を講じてください。

小麦

1 ほ場の選択

小麦は湿害に弱く、排水性の不良なほ場では収量および品質の低下を招きやすいため、**可能な限り排水性の良好なほ場を選定**する必要があります。

また、連作を行うと、雑草の増加や土壌病害のまん延、地力の低下を引き起こし、生産性の低下につながるおそれがあります。このため、**他作物との適切な輪作体系を導入することが重要です。**

2 排水対策

水稻収穫後のほ場に小麦を作付けするほ場では、サブソイラによる**弾丸暗渠の施工**を行い、**土壌の排水性改善**を図ります。また、地表水を速やかに排水するため、**額縁明渠**を設置します（写真3）。

額縁明渠は必ず排水路に接続し（写真4）、生育期間を通じて点検および補修を行うことが重要です。

重粘土ほ場など、**地下排水が難しいほ場においては、ほ場内小明渠の施工が有効**（写真5）です。なお、施工に際しては一部の小麦を踏圧・損傷する場合がありますが、収量への影響はほとんどありません。



写真4 排水口の掘り下げ

水尻は大きく掘り下げ、排水溝とつなげ、フリードレーン下部から排水。



写真3 排水溝（額縁明渠）の設置

排水溝への集水は耕起土層からの流出が多いので、排水溝は耕起深より少なくとも5～10cmは深く掘ることが必要。



写真5 ほ場内小明渠の施工例

3 土壌改良資材・たい肥の施用

(1) 土壌改良資材

県内の水田転換畑では、土壌 pH が低下しているほ場が多く見られます。土壌 pH が低下すると、麦類の生育が阻害されます。このため、適切な土壌 pH (6.0～6.5) を維持するために、石灰資材を施用することが重要です。

なお、石灰資材の施用効果は直ちに現れるものではありませんが、ほ場管理の中で継続的に施用することが重要です。

(2) たい肥

たい肥等の有機物の施用は、土を膨軟にする、根張りをよくする、施肥の効果を高めるなどの利点があります。継続して施用すると化学肥料のみを使用したほ場より収量・品質が向上します。石灰資材と同様、計画的なほ場利用の中で積極的に施用してください。

4 プラウ耕

水稻栽培では一般的にロータリ耕が行われますが、小麦栽培では雑草の抑制や水はけの改善のためにプラウ耕が望ましいケースもあります。プラウ耕等を行う場合は、作土や耕盤の深さなどを調査し、不良な重粘土、やせた下層土が作土に混入することを避けるなど、土壌タイプを考慮しながら事前の実施可否を十分に検討してください。

5 砕土・整地

ほ場内に大きな土塊が残存している場合は、砕土および整地作業を十分に行う必要があります。土塊が多いと播種精度が低下し、発芽不良などの問題が生じやすくなるため、水稻からの転換後 1～2 年間は、特に丁寧な砕土・整地を行うことが重要です。

特に砕土の良否は発芽に大きく影響することから、一般に地表から約 10cm の層における砕土率（粒径 2 cm 以下の土塊の割合）を 70%以上確保する必要があるとされています。

砕土作業は、ドライブハローやバーチカルハローなどのハロー耕やロータリ耕により効率的に行うことができますが、作業時の土壌水分条件によっては砕土性が低下する場合があるため注意が必要です。また、プラウ耕を実施した場合には、砕土作業をプラウ耕の方向に対して直角または 45 度の角度で行い、その後はほ場の均平を図るために整地を行います。

なお、ロータリ耕後は土壌が水分を保持しやすくなり、降雨後に乾きにくくなる傾向があるため、作業は播種直前に実施することが望まれます。アップカットロータリ（逆転耕）を用いると、表層の砕土率が高く、下層は粗い二層構造となるため排水性が向上し、有機物の埋設性にも優れることから、その後の播種作業を円滑に行うことができます。

6 播種

(1) 適期播種

播種期が遅れると、根張りが不十分になり、凍上害が発生しやすくなります。また、茎数や穂数が不足することにより、収量が減少するリスクが高まります。このため、適期に播種するよう心がけてください（表 1）。

表 1 県内の地帯別播種適期

地 帯	播種期(月日)	
	早限	晩限
高標高地	9 月 15 日	9 月 25 日
県北部	9 月 15 日	9 月 30 日
県中部及び沿岸北部	9 月 20 日	10 月 5 日
県南部(沿岸南部)	9 月 25 日	10 月 20 日

(2) 種子予措

種子は、病害汚染等の無い健全で優良なものを使用します。種子伝染性病害の発生防止の観点から種子消毒は必ず実施します。

(3) 施肥

麦類の施肥は、越冬後の追肥の占める割合が高いですが、基肥により越冬前に十分な生育量を確保することが、収量の増加や品質の向上に大きく影響します。

標準的な基肥量を表2に示しています。なお、土壌改良目標値を満たしたほ場での施肥管理は、「補給型施肥基準」を適用することができます。

補給型施肥とは、「ほ場からの収穫物による肥料分の持ち出し量」と浸透水による「土壌養分の溶脱量」を施肥によって補給する、という考え方で作られた施肥基準です。この施肥基準では、たい肥と化学肥料を区別することなく、含まれる肥料成分の合計で施肥設計しますので、たい肥の活用で肥料費を抑えることが可能です。詳しくは最寄りの農業改良普及センターにお問い合わせください。

表2 麦類の標準的な基肥量（成分 kg/10a）

窒素 (全域)	リン酸		カリ (全域)
	中南部 転換畑	中北部 普通畑	
4～6	10～15	15～20	10～12

※水田から転換して初年目、2年目の「ゆきちから」の基肥は、茎数確保のため窒素6 kg/10a とする。

(4) 播種量と播種方法

ア 播種量

品種別の播種量・目標出芽本数は、表3を基本とします。

砕土が粗い、土壌が湿っているなどの条件下では苗立ち率が低下します。このような条件下で播種する場合、播種量を1割程度増やすなどの対策を行います。

また、降雨などによりほ場が乾かず条件が整わない場合は、適期を過ぎたとしても無理に作業を行わず、ほ場条件が改善するまで播種を中断します。この際は、播種晩限から1週間遅れるごとに、播種量を1割ずつ増やします。

ナンブコムギは、前作で縞萎縮病が発生したほ場への作付けをできるだけ回避しますが、やむを得ず連作する場合は、播種時期をできるだけ適期内の晩播とし、播種量は標準の3割増とすることにより、茎数の確保を図ります。

イ 播種方法

ドリル播きの播種深度は3 cm 程度を目標とし、全面全層播きでは、均一に散播のうえハローなどで浅く（深さ5 cm 程度）攪拌し覆土します。播種深度が深すぎると、出芽のバラツキや出芽率の低下、生育の遅れが問題になり、浅すぎると、凍上害や鳥害、干ばつ害、除草剤の薬害などが生じやすくなります。

表3 品種別の播種量と目標出芽本数

品種名	播種量 (kg/10a)		目標出芽本数 (株/㎡)
	ドリル播	全面全層播	
ナンブコムギ	4～6	5～ 8	70～110
ゆきちから	6～8	8～10	120～160
銀河のちから	6～8	8～10	120～160
ナンブキラリ	6～8	8～10	110～150

7 雑草防除

令和7年産では、雑草が多発したほ場の小麦からやや高い濃度のDONが検出されています。雑草防除を確実に実施します。

(1) 非選択性除草剤

特に連作では、前年に発生した雑草が播種前に出芽し、耕起で十分に埋没できない場合があります。このような場合、耕起前または播種前に非選択性除草剤を利用し、雑草の出芽個体を防除します。なお、難防除雑草のネズミムギ（イタリアンライグラス）に対しては、耕起前に（イタリアンライグラス出芽後）に非選択性除草剤を散布し、播種後の土壌処理剤散布までの期間をできるだけ短く（10 日以内）すると効果的です。

(2) 土壌処理剤

初期に発生した雑草ほど生育期間が長くなり、小麦の生育に大きな影響を及ぼしますので、播種後に出芽する雑草を土壌処理剤によって確実に防除します。

耕起から播種、土壌処理剤散布までは、間隔を開けずに実施します。また、高い効果を得るため、①碎土・整地を丁寧に行う、②散布のタイミングを逃さない、③適湿条件で散布することが重要です

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyoushizen/yasei/1049881/1043255.html>

- 1 クマに遭遇しないために
 - ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール
- 2 クマを寄せ付けない
 - ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 3 出会ったときの行動
 - ・ 背を向けて走って逃げない
 - ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 4 襲われそうになったら...
 - ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は9月24日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。